

46
九

西
三
九
八

立案 昭和三年四月十八日

決裁 昭和 年 月 日

爵位課長

宗秩寮總裁



宮内事務官



故海軍大尉内田政彦位階追陞件

昭和三年四月十八日裁可
四月十八日官報報告濟

宮内省

裏面白紙

56



故海軍大尉内田政彦位階

追進ノ件
右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和三年四月十七日

内閣總理大臣男爵田中義一



内閣

海軍第六一號

案起 昭三年四月十七日

裁可 二年四月十七日 施行

年月日

内閣總理大臣 五

内閣書記官長

内閣書記官



故海軍大尉從五位勲三等内田政彦ハ
別紙海軍大臣上奏ノ通功績顯著ナル
者ニ候處本月十二日死去ノ趣ニ付特旨
ヲ以テ左ノ通位階追陞ノ件上奏相成
然ルヘシ

内閣

故海軍大尉從五位勲三等内田政彦
特旨ヲ以テ位一級追陞セラレ

從五位勲三等内田政彦

叙正五位

四月十二日付

海軍人第一三〇

故海軍大尉從五位勲三等 内田政彦

右者幕末内外多事ノ秋ニ當リ勤王ノ志厚ク夙ニ討幕
軍ニ加ハリ明治元年八月越後新潟表ニ鹿兒島藩第十六番小隊
トシテ出軍シ後羽州秋田庄内ニ轉戦シ明治四年八月末歸
國スル迄日夜王事ニ奔走シテ匪躬ノ節ヲ盡シタルモノニ有
之候後志ヲ海軍ニ立テ明治八年四月海軍少尉補ニ任官
爾來身ヲ軍職ニ奉スルコト十六年其ノ間明治九年山口ノ
乱同十年西南役ニ征討軍ニ加ハリ勤勞アリ歸リテ刑事課
ニ移リ爾後主理トシテ終始シ明治二十四年海軍將校分限令ニ
ヨリ豫備ニ編入法務官トシテ立チ明治三十八年十二月休
職ニ至ル迄更ニ引キ續キ十四年間海軍法務官ニ職ヲ奉
シ海軍司法事務搖籃時代ニ勉勵力ヲ盡シ出テハ佐世

保市長トシテ十年間軍港ノ市政ニ執掌シ此間日獨戰爭
等ニ會シ能ク軍部ノ要求ヲ充タシテ作戰上利便ヲ得シコ
ト歎カラス其ノ功績顯著ナルモノニ候處今回卒去致候ニ
付テハ特別ノ御詮議ヲ以テ正五位ニ敘セラレ度此段及上
奏候也

昭和三年四月十六日

海軍大臣 岡田 啓



めくれず

履歷書
鹿兒島縣士族
海軍大尉張五位勳三等 内田 政彦

嘉永五年二月十五日生

明治元年八月二日 越後新潟表應援トシテ鹿兒島藩第一番小隊ニテ

出陣スルヲ羽州秋田庄内道進軍ス

二年五月六日 鹿兒島藩第一番大隊六番小隊ニテ徵兵トシテ上京

八月十三日 箱館脱兵征討ノ應援トシテ呂海ヲ登スト虽モ平定後

ニ付直ニ鹿兒島へ皈ル

明治十三年八月十二日 任海軍少尉

十六年十一月五日 任海軍中尉

十九年七月十二日 勅令第五十二號ニ依リ中尉ハ大尉奏任五等ニ被定

二十年十一月二十四日 陞敍奏任官四等

海 軍

二十二年二月十三日 任主理

二月十五日 敍奏任官四等

免本職

二十四年六月十九日 横須賀鎮守府軍法會議勤務被仰付

二十八日 横須賀鎮守府軍法會議勤務被免 佐世保鎮守府

軍法會議勤務被仰付

明治二十八年戰後ノ功ニ依リ勳五等瑞寶章及金二

百円ヲ授ケ賜フ

二十九年六月三日 陞敍高等官六等

佐世保鎮守府軍法會議勤務 佐世保鎮守府兼

務被免 横須賀鎮守府軍法會議勤務 横須賀

鎮守府兼務被仰付

十月八日 横須賀鎮守府軍法會議勤務被免 横須賀鎮守

明治三十一年 勳正八位
明治三十一年 勳正七位

明治三十一年 勳正七位

明治三十一年 勳正七位

明治三三
叙正六位

本三十二年十月四日	府司法部長横須賀鎮守府軍法會議議長兼被仰
十月九日	補横須賀鎮守府司法部長
本三十六年十月十日	陞被高等官五等
本三十七年三月三十一日	補横須賀鎮守府軍法會議附
本三十八年三月二十日	陞被高等官四等
三月十八日	被叙五位
三月十八日	文官令限令第百一號第一項第四號依り休職ヲ命ス
本三十九年四月一日	明治三十七年戰役ノ功依り勲三等瑞寶章及金三百五十円ヲ授ケ賜フ
本三十九年八月二十七日	佐保市長就任(本三十九年九月三日任期満限)
本四十年三月十七日	休職満期
大正四年十一月七日	大正三十四年事件ノ功ニ依り旭日中綬章及賜金六百円

海軍

美濃全案十三行紙

立案 昭和三年四月廿日

決裁 昭和三年四月廿日

官房宿直

官房宿直
印

故海軍大尉從五位勲三等内田政夫

特旨より位一級追陞せらる

從五位勲三等内田政夫

叙正五位

四月十日付

宮内省

右之通本日 宣下相成候條此旨及傳達候位記竝
辭令ハ追う可及回送候也

昭和三年四月十七日

宗秩寮總裁

海軍大臣

結



一故海軍大尉從五位勳三等内田政彦

右位記並辭令及回送候條交付方御取計有之度候也

昭和二年四月十八日

宗秩憲總裁子壽仙石政敬

海軍大臣

宮内省

裏面白紙